

クワモドキの観察

佐藤茂樹

クワモドキは他の地方はいざ知らず、昨昭和31年春に始めて、神戸市須磨区板宿町を流れる、妙法寺川の川原で、その自生を見たもので、葉の分裂したところはアサの葉に似ており、花はブタクサそつくりの一年生草本である。果実は長さ6~7ミリ、径4~5ミリで微細という粒ではないし、粘液を出して粘りつくというものでないのに、どうしてこの川原に運ばれてきたのか、果実の表面には縦軸に平行的ではあるが、5~6個の棘状の短い突起があるので、他物に突き刺さつても運ばれたものか、まず散布の方法に疑問をもつ。

この植物の若いものを始めて見たときには、属はおろか科さえ解らず、分裂葉からオオハongoソウヤアサを想像したり、粗毛の多い所からヒユの仲間かと思つたりして、図鑑などを見たが、資料の乏しい私の手元では、それらしい図や記載は皆無だつた。何はともあれ移植して見ようと、その中の数本を花園に植えて見た。全部が活着して7月下旬には、ヒユに似た花穂を出し、花軸が伸びると想像とは全く違つた、ブタクサに似てやや大形の雄花が咲いたので、始めて分類上の位置が明かになつた。種名についてはその後になつて、室井幹事の御好意によつて知ることができたものである。

Ambrosia trifida L.

クワモドキ (アサノハブタクサ)

属名は牧野植物図鑑にギリシヤ語の神の食物の意とあり、種名は辞書によると3つに分裂していることを示している。ブタクサも常緑のブタクサモドキも共に、北米原産の帰化植物であるから、この植物もおそらく何かの機会に、はるばる太平洋を渡つてきたものだろうと思われる。

発生地妙法寺川は、領家花崗岩だといわれる、黒雲母花崗岩から成る地域で、高取山と須磨連山との間を深く浸蝕して、奥の白川峠の方から南に向い、板宿に出て扇状地を作り、東須磨の平野を流れて瀬戸内海に注ぐもので、昭和13年の大水の際、この川もはらんして人畜、田畑に大損害を与えたものであるが、今は改修されて兩岸は石垣積となり、川原といつても、花崗岩の風化でできた砂れきと、泥土の堆積したもので、センダングサ、タガラシ、カワジサ、セリ、イヌムギ、カモジグサ、ミゾソバなどの生える程度の、き

わめて狭いものなのである。

妙法寺川の川原に、この種子が運ばれてきた遠因は別として、近因が川の上流にあるかも知れないので、上流に当る妙法寺への昆虫採集のときも、白川峠への植物化石採集の際にも、特別に注意を払つたものであつたが、それらしいものは全く見られなかつたし、生えた川原を中心に付近の草地を捜したが、ついに見出すことができなかつた。

移植したものはその後も順調な生育をとげ、8月の乾天続きにも雑草の故か、格別の衰えも見せず、台風9号と12号の被害も少なくすんで、無事に果実の完熟を見ることができた。32年春にまた種子からは、ウリに似た楕円形の二枚で厚い子葉を出した。これで一応幼植物の時代から、開花結実に至るまで、一世代の輪廻をおかた見届けたので、次にその大要をまとめてみることにした。

茎 一年生の草本で茎の高さ1~1.5メートルに達し、太さは食指大のものもあつて、草としては壮大な方で、全株に粗毛を生じ、対生葉の葉えきから枝を分つので、上下の枝は必ず交互直角に位置し、前後左右に規則正しく排列し、全体としては四方に枝を出して広い空間を占めて展開する。

葉 おおむね対生で多くは3~5の掌状に分裂する。裂片は長楕円形で先は長く鋭くとがり、葉脚は楔形を呈し葉柄に向つて流れる。葉柄は長くその基部は多少茎をだくようになつている。最下部の葉は分裂しないし、花穂の下部の小形葉も分裂せず、この葉は不完全で柄もない。縁辺には粗い鋸歯があり、葉の表面は濃緑色であるが、裏面の色は薄い。表裏共に短い粗毛があり、乾燥したものはムクノキ状のザラザラした手ざわりがある。

花 雌雄同株で雄花は長い穂をなし、雌花は雄花穂に近い葉えきに生ずる。

雄花 雄花序は茎頂や枝端に穂状をなし、頭状花を50~60個から100~200個もつける、すこぶる長いものがある。頭花の直径は5~6ミリで、1個の頭花の中に小花が25~30個もある。小花は全部が5の合弁管状花で、開花前のは球形であり、まさに開かんとするものは、中の黄色の花粉が透いて見え、花卉そのものも黄色を帯びるようになってくる。周辺の花から咲きはじめて段々と中央に向つて咲き進むので花期が長

い。中の方にある未開のものは、小さい球形で青緑色を呈している。雄ずいは集やくではなく、5本は互に離生している。頭花を保つ総苞は浅い皿状で、短かい柄で花穂の軸につき、下に向っているのがおもしろい。このため花の雨露にぬれるのを防ぎ、花粉の飛散にも都合がよく、進化の上から優位者であることが考えられる。総苞は緑色で皮質であり、外に向つた方に歯形の切れこみがある。頭花は下方のものから順次上方に咲きのぼる無限花序で、各頭花の中では周辺から中心へ咲くので、後には長い花穂全体の上から下ま

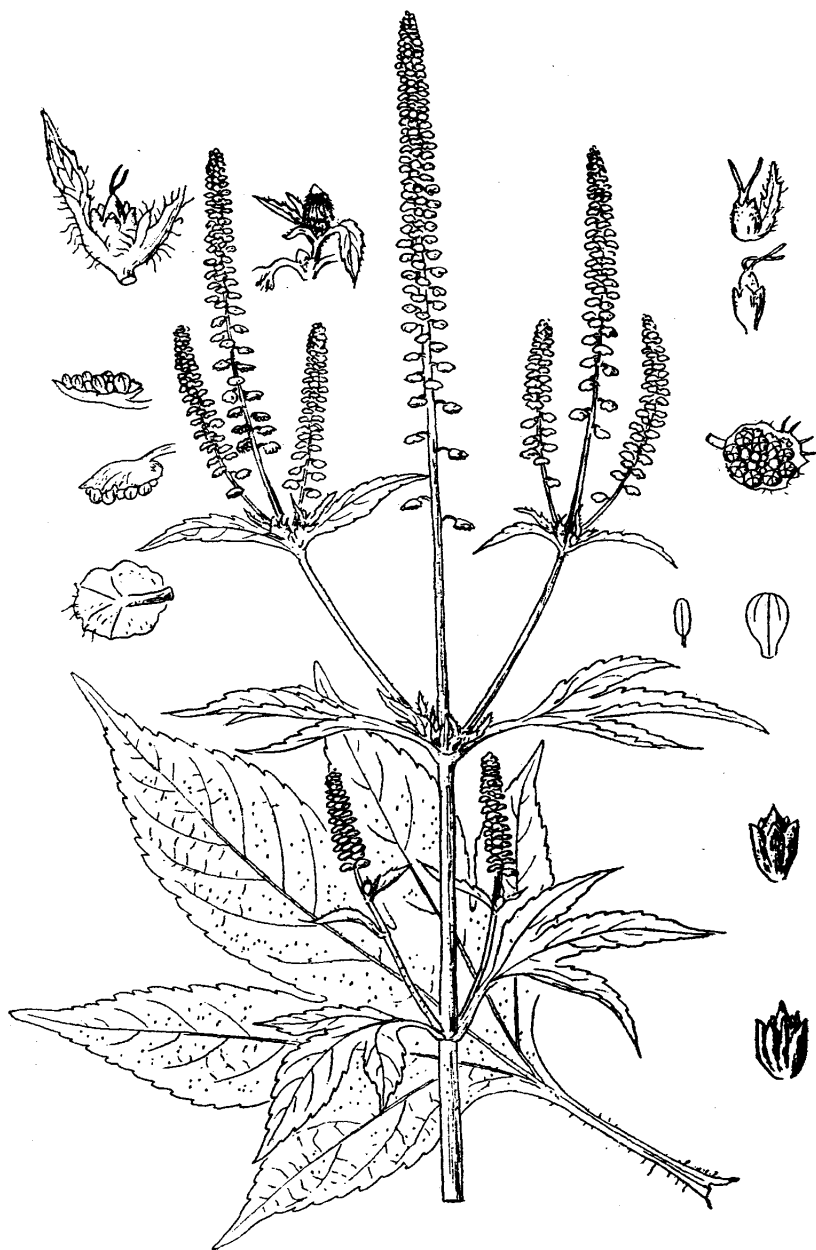
で、百余の花が一斉に咲いて、黄色の花粉を散ずるため、花粉の量がきわめて多く、この草の茂つた路傍草原では、花時そよ吹く風に振り出される花粉で、あたり一面黄色一色となり、外国に多い呼吸器の障害、花粉病の誘因をなすであろう、自然界の情景が想像される。花期は7月下旬から8月を越えて、9月始めにまで及んだ。

雌花 雌花序は枝を分つ葉えきを主とし、まれには雄花穂の花軸の下方に生じ、単立するものもあるが、多くは数個集つて塊状をしている。頭状花は1個の花

から成り、緑色で葉状の総苞に包まれる。子房は倒卵形で先は鋭くとがり、柱頭は白色糸状で先が2つに分れている。

果実 未熟のものは初め緑色であるが、後に白味勝ちの黄色となり、一部には紫色の不規則な条線も現われ、熟するとまた色が変わつて暗褐色になる。完熟して自然に地に落ちたものは、色も形も土粒に似ていて判別し難い。果皮には肩部に5~6個多きは9個の突起があり、棘状で長さは短かいが鋭くとがり、果実の縦軸にはほぼ平行で上に向っていることは、前に記した通りである。堅い果皮を除くと中に1個の黒い種子がある。雌花序の中には未熟に終る偽果状のものがあり、単立した花からできた果実は、塊状の集花からできた果実より目立って大きく、同じ株から生じた果実でも大小種々で、ほうこう変異が著しい。

以上でクワモドキの
(270ページへ)



(246ページより)

一代記を終るが、同一環境でありながら株によつて雌花の数に大差があつたり、節間にも長短があり、中には節間が極端に短縮して、四枚の輪生葉状となり、一節から四方に枝を出したものもあつて、僅かの株の間

にも個体異変の多いのが、著しく目立つ現象であつた。近縁のブタクサがいたる所に在来種を押しつけて、単純群落をつくつているように、この植物もほぼ類似のコースを取つて、各地にその土着の姿を見るようになるのではあるまいか。